

杉野兵曹長は生きていた！

古い話で恐縮だが、日露戦争で名誉の戦死を遂げ、軍神となった廣瀬武夫海軍中佐を称えた文部省唱歌「廣瀬中佐」1番の最後に歌われる「～杉野はいずこ 杉野は居ずや」は、哀愁を帯びた節回しが国民の胸をやるせない思いに締め付け、大いに流行った。日本画家だった祖父も大好きな節で、庭で菊作りをしながら、よく口ずさんでいたのを思い出す。

その歌詞に歌われた「杉野孫七上等兵曹(兵曹長に昇進)」は、旅順港閉塞作戦で用船「福井丸」にて行方不明になり、沈没直前まで探し回った指揮官・廣瀬中佐の部下を思う切ない気持が悲劇となり美談となって全国民の涙を誘った。

その美談の原因となった杉野兵曹長が、実は生きていたとの噂はこれまでも何度かあった。しかし、最近手にした「静岡県西部海交会」誌(平成9年1月1日)掲載の「日露戦争秘話・杉野はいずこ」によれば、かつてハイラル陸軍特務機関にいた札幌在住の横田正二さんという方が、昭和18年新京に甘粕正彦大尉を訪問した時、その杉野兵曹長に引き合わされたそうである。

日露戦勝後、朝鮮・釜山まで来て帰国のために電報を打ったところ、「軍神廣瀬中佐とともに、すでに戦死したことになっているうえに、軍神の部下という名誉まで賜って祀られている。頼むから内地へ帰らずにこのままでいてくれ」という非情な返事があった。オジと3人の子どもを抱えた妻までがそう言ったという。杉野兵曹長はやむなく満州に戻り現地の女性と家庭を持って、二人の間には多くのこどもが生まれたそうである。

これに似た話はフィリピンでも、ビルマでも仄聞いた。今となっては、真相は闇の中だが、あまりにも落差の大きい運命に心が痛む。日本に残された杉野兵曹長の子息のひとり、終戦時に海軍大将となって、戦艦「長門」第32代最後の艦長だったそうである。

(近藤)